

第4回気象学史研究会

「わが国における大気放射学の草創と東北大学」を開催

気象学史研究連絡会

気象学史研究連絡会では第4回の気象学史研究会を「わが国における大気放射学の草創と東北大学」をテーマに、2018年度秋季大会にあわせ10月31日（水）仙台国際センターにて開催した（第1図）。予想を大きく超える約60名の参加があった。

今回は、第二次世界大戦終戦の1945年に、東北帝国大学（1947年から東北大学）理学部に開設されたばかりの気象学講座の教授に就任した山本義一（1909～1980）によってわが国の大気放射学が草創され、山本とその後継者たちによって世界的水準の研究に到達する過程について、学生時代から長きにわたって山本と研究を続け、研究発展を担ってこられた田中正之氏（東北大学名誉教授）の講演をいただいた。また気象

学講座開設以前の歴史的系譜について、大学に保存されている文書を基に加藤 諭氏（東北大学史料館）に講演をいただいた。

田中氏は「わが国における大気放射学の草創—山本義一先生の足跡—」と題して、その研究の足跡を紹介した。講座担任教授として赴任した山本は、数年間の調査・考察を経て、大気放射学を講座の研究教育の柱とすべきとの着想を得た。山本の大気放射学研究は、教授就任以降に始められたもので、まさに無からの出発であった。最初に地球放射（赤外熱放射）の研究が取り組まれ、大気各高度での赤外放射フラックスを高層気象観測データから精度良く求めることの出来る「放射図」が1952年に発表され、その高い精度が注目されて内外で広く用いられた。研究はさらにエアロゾルや雲を含む現実的な大気の放射伝達特性、赤外活性気体の吸収特性の実験や理論、エアロゾル放射特性の解明、放射理論のリモートセンシングへの応用などへと発展した。山本の慧眼あつてのことであると強調された。大気放射学には今日なお多くの課題が残されており、その解明には力学、雲物理、気候モデル等との連携が不可欠であると結んだ。山本の数々の研究成果をわかりやすく、その人となりや多くのエピソードも交えて紹介し、1時間を超える熱のこもった講演であった。

加藤氏は「第二次世界大戦時・戦後の東北大学と科学研究動向～理学部の動向を中心に～」と題して、東北大学保存文書を基に、気象学講座開設に至るまでの東北帝国大学での関連活動を紹介した。大正期から昭和初期、地元篤志家らの寄附等により気象等に関する観象施設が設置されたが、専任教官配置には至らなかったこと、戦時期において科学動員、人材養成と地球物理学分野専門性担保の観点から、1940年以降地球物理学教室設置の概算要求が1944年まで毎年続けら



第1図 第4回気象学史研究会（2018年10月31日仙台国際センター小会議室1）の様子。講演する(a)田中正之氏と(b)加藤諭氏。(c)多くの参加者があった。(d)次回2019年5月の第5回研究会予定を紹介する三上岳彦気象学史研究連絡会世話人（第5回研究会コンピーナー）。

れ、ようやく1945年に気象学の講座が新設されたことなど、戦後の気象学講座の発展に、長い準備期間があったことを紹介した。大学アーカイブを日本で最初に開設するなど、東北大学が記録を大事にしていることが、このような報告の基礎になっていることも強調された。

質疑応答では、山本が大気放射学を選んだ最大の動機について質問があり、もともと期待されていた乱流や接地境界層の研究が、戦後の資源不足できわめて困難な状況下で、東京大学・京都大学に続く3番目の気象学講座として世界にも負けないものを追求した結果であろうと田中氏から回答された。また、民間からの寄附による観象台開設については当時一大産業であった養蚕・製糸業からの要請を背景としたものであること、戦中期に粘り強く概算要求が続けられた背景に、中村左衛門太郎（1891～1974、地震学者、東京帝国大学卒業後中央気象台を経て当時東北帝国大学理学部教授）や加藤愛雄（1905～1992、地球電磁気学者、東北帝国大学卒業後、当時同大学理学部教授）らの尽力が

あったことがうかがえると加藤氏から回答された。

戦後わが国における大気物理学の発展過程について参加者の考察を深めていただく一助になったのであれば幸いである。参加いただけなかった方にも、研究会の内容をお伝えしたく、講演いただいた両氏には、要旨の「天気」掲載に向けてご準備いただいている。

当日は参加者の多さに入室を諦めて帰られた方も少なからずおられたと聞いている。この場を借りて運営の勝手をお詫びしたい。

最後になるが、ご講演いただいた田中氏・加藤氏、また開催にあたりご支援ご協力をいただいた講演企画委員会および大会実行委員会各位にこの場を借りてあらためて御礼申し上げる。

第5回の気象学史研究会は2019年度春季大会（東京都渋谷区）にあわせて5月17日（金）に開催の予定である。研究連絡会世話人の一人である三上岳彦（首都大学東京名誉教授）をコンビーナーとして、「20世紀の気候変動と人為的エアロゾルの影響」をテーマとして準備している。